

上障子遺跡発掘調査報告書

沼津市文化財調査報告書 第106集

上障子遺跡発掘調査報告書

二〇一三

沼津市教育委員会

2013

沼津市教育委員会

沼津市文化財調査報告書 第106集

上障子遺跡発掘調査報告書

2013

沼津市教育委員会

例 言

1. 本書は沼津市下香貫字上障子 394 他に所在する上障子遺跡^{かみしょうじ}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社平安による平安沼津会館の立体駐車場建設工事に先立ち、株式会社平安から沼津市が委託を受け、平成 23 年 4 月 11 日～4 月 22 日まで実施された。
3. 当該地は、平成 23 年 1 月 26 日に実施された確認調査により、新規の埋蔵文化財包蔵地であることが判明したため、「上障子遺跡」として登録されたものである（教文 1714 号、平成 23 年 2 月 10 日付）。
4. 整理事業は、平成 24 年度事業として株式会社平安から沼津市が委託を受け、沼津市教育委員会が担当した。遺物のうち土器の一部については、株式会社ラングへ業務委託を行い、3次元レーザースキャナー（PEAKIT）による実測図を作成した。その他については整理補助員の工藤が素図を作成し北がトレースを行った。また、現地で取得した遺構のデジタルデータについては、株式会社シン技術コンサルへの業務委託（担当：岡部貴史）によって編集を行った。

5. 発掘調査および整理事業の関係者は以下のとおりである。

| | | | |
|-------|----------|-------------|----------------------------------|
| 事業委託者 | 株式会社平安 | 代表取締役 | 中野宰孝 |
| 事業受託者 | 沼津市 | 市長 | 栗原裕康 |
| 事業主体者 | 沼津市教育委員会 | 教育長 | 工藤達朗 |
| 事業担当者 | 沼津市教育委員会 | 文化振興課 課長 | 宮下義雄（H23） 井原正利（H24） |
| | | 副参事 | 初又利明（H23） |
| | | 課長補佐 | 勝又恵三 |
| | | 主幹兼文化財調査係長 | 山本恵一 |
| 調査担当者 | | 主幹 | 池谷信之 |
| | | 調査員 | 片平 剛（パル文化財研究所） 渡邊朱里（パル文化財研究所） |
| | | 調査補助員 | 日下恵一（パル文化財研究所） |
| 整理担当者 | | 主幹 | 池谷信之 |
| | | 臨時嘱託 | 北佳奈子 |

6. 整理作業は、池谷と北が担当し、沼津市文化財センターにて行った。報告書本文の執筆および編集は、池谷指導のもと北が行った。また、遺物図版の作成において、整理補助員の工藤みさ子の補助を得た。事務処理は、事務補助員の土屋周子が担当した。
7. 本書に係わる上障子遺跡の発掘調査資料および出土遺物は、沼津市教育委員会事務局文化振興課文化財調査係（沼津市文化財センター 〒410-0873 沼津市大諏訪 46-1 TEL 055-952-0844）で保管している。

凡 例

1. 遺構実測図中の水系高は、標高を示す。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、次のとおりである。
【遺構】 遺構分布図：1/60 土坑・ピット：1/40
【遺物】 土器および土製品：1/2 または 1/3
3. 遺構の略号は、次のとおりである。
S K：土坑 P T：ピット
4. 土層および土器胎土の色調については、新版標準土色帳に基づいて記載している。

目 次

例 言

| | |
|-----------------|----|
| 第Ⅰ章 調査経過 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 発掘調査事業の経過 | 2 |
| 第3節 整理作業の経過 | 3 |
| 第Ⅱ章 遺跡の環境 | 4 |
| 第1節 遺跡の位置と地理的環境 | 4 |
| 第2節 周辺遺跡と歴史的環境 | 6 |
| 第3節 遺跡の層位 | 10 |
| 第Ⅲ章 遺構と遺物 | 13 |
| 第1節 遺構と遺物の分布 | 13 |
| 第2節 遺構 | 13 |
| 第3節 遺物 | 14 |
| 第Ⅳ章 調査成果 | 19 |

写真図版

報告書抄録

挿図目次

| | | |
|--------|------------------------------|----|
| 第 1 図 | 遺跡位置図 | 5 |
| 第 2 図 | 明治 34 年大日本帝国陸地測量部二万分一地形図「沼津」 | 6 |
| 第 3 図 | 上障子遺跡周辺地形図 | 7 |
| 第 4 図 | 周辺遺跡分布図 | 9 |
| 第 5 図 | 土層セクション図 | 11 |
| 第 6 図 | グリッド設定図 | 12 |
| 第 7 図 | 遺構分布図 | 13 |
| 第 8 図 | 土坑およびピット実測図 | 14 |
| 第 9 図 | 第 1 号土坑出土遺物 | 14 |
| 第 10 図 | 弥生時代後期～古墳時代出土遺物（1） | 15 |
| 第 11 図 | 弥生時代後期～古墳時代出土遺物（2） | 16 |
| 第 12 図 | 律令時代出土遺物 | 16 |

挿表目次

| | | |
|-------|----------|----|
| 第 1 表 | 周辺遺跡一覧表 | 8 |
| 第 2 表 | 土器観察表（1） | 17 |
| 第 3 表 | 土器観察表（2） | 18 |
| 第 4 表 | 土製品観察表 | 18 |

第 I 章 調査経過

第 1 節 調査に至る経緯

(1) 確認調査と遺跡の新規登録

沼津市下香貫字上障子 394 他の土地は、南側に建つ平安沼津会館の平面駐車場および宅地となっていたが、平安沼津会館葬祭場の改築に伴い、既存駐車場の改修が計画され、その対象地となった。当該地周辺では、0.4km 南東で藤井原遺跡が確認されているものの、埋蔵文化財の詳細な分布状況は把握されておらず、その有無を確認する必要があった。そこで、株式会社平安（沼津市大岡 2170-1 代表取締役 中野幸孝）より沼津市教育委員会宛に提出された「埋蔵文化財分布調査指導申請書」を受けて（平成 23 年 1 月 18 日付）、沼津市文化財センターでは同年 1 月 26 日に試掘調査を行った。

対象地（3580.8㎡）に建設予定の駐車場は東西方向に長く、東から第 1 駐車場、第 2 駐車場の 2 か所が計画されていたが（第 6 図）、第 1 駐車場は舗装工事のみを行って平置駐車場として利用する計画であったため、2 層式の立体駐車場が建設される第 2 駐車場部分を中心に試掘調査を行うこととした。2×2m の試掘坑を 3 か所設定し調査を実施した結果、そのすべてから奈良・平安時代の土師器が出土し、1 か所で住居址プランの一部が確認された。

確認調査の結果、当該地は新規の埋蔵文化財包蔵地であることが判明したため、静岡県教育委員会と協議を行い「上障子遺跡」として新規登録した（教文 1714 号、平成 23 年 2 月 10 日付）。

(2) 本調査の実施と民間調査関係機関の導入

確認調査の結果を受け、株式会社平安と沼津市教育委員会との間で本調査範囲について協議が行われた。西側の第 2 駐車場建設予定地のうち立体駐車場部分については、2 階部分を支える柱の基礎が遺物包含層に及ぶものの、その掘削面積は非常に狭く、埋蔵文化財に与える影響は小さいと考えられるため、担当者による工事立会とすることとした。しかし、北西隅に設置予定の防火水槽部分については、掘削範囲が遺物包含層に大きく及ぶため、記録保存のための調査を実施することで合意した。

平成 23 年 3 月 9 日付けで株式会社平安より「埋蔵文化財発掘の届出書」が提出され、本調査の実施時期が検討されたが、この時点で平成 22 年度の残り日数が少ないことに加え、「埋蔵文化財発掘調査受託事業」費の執行はすでに確定していたことから、同年度内に調査を実施することは不可能であった。また、次年度の予算要求もすでに終了しており、発掘調査経費を平成 23 年度予算に計上することは困難となっていた。株式会社平安からは「平安沼津会館立体駐車場建設予定地の発掘調査の実施について（依頼）」が提出され（平成 23 年 3 月 14 日付）、建て替え準備中である平安沼津会館（セレモニーホール）の 9 月の開館に合わせ、立体駐車場用地内の埋蔵文化財について、迅速な発掘調査を行うことが求められた。

この状況を打開するためには、民間調査関係機関を導入する以外に手段がないことから、文化庁次長通知の「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」に基づき、民間調査関係機関を介して調査実務（排土・測量・写真撮影等に限定）の提供を受け、沼津市教育委員会が主体者となって調査を実施することとした。調査の実務は有限会社パル文化財研究所（静岡市清水区横砂東町 34-4 代表取締役 片平剛）が担当し、株式会社平安、沼津市教育委員会、有限会社パル文化財研究所との間で協定書を交わし、埋蔵文化財の取扱い、発掘調査と整理調査の実施方法について相互に確認した（平成 23 年 3 月 24 日付）。また、報告書刊行のための整理事業については、沼津市教育委員会が平成 24 年度事業として実施することとした。

第2節 発掘調査事業の経過

現地調査は平成23年4月11日～4月22日にかけて行われ、調査面積は延べ40㎡にのぼる。4月11日に機材を搬入し、基準点を設置した。12日には表土の掘削を行い、13日からは作業員による遺物包含層の精査を開始した。また、同日にバリケードやプレハブハウスなどの設備を搬入している。

14日には調査区内および遺物包含層の精査と並行して、調査区の四方にトレンチを設定し、15日にかけて掘削を行い、下位の土層の状況を確認した。18日、調査区南西隅付近で23点の土器がまとまって見つかるとともに、さらに19日にも12点の土器が発見され、調査区北東隅では第1号ピットが検出された。20日、まとまって見つかった土器の下で第1号土坑を検出し、調査区の中央付近では第2号ピットを検出した。21日、調査区北壁と西壁の測量および写真撮影を行い、遺構の完掘状況も記録した。21日以降はバリケードやプレハブハウス、機材の搬出を行い、22日をもって現地で作業を終了している。

遺構・遺物・土層断面などの実測は光波測距儀によって行い、電子野帳に記録した後、沼津市が導入している遺跡管理システム（シン技術コンサル製）に取り込んでデータベース化した。土層断面の註記は、第一合成株式会社製の土色計（SCR-1）を用いて色調を測定し、新版標準土色帳に準じて記載を行っている。また、現地の作業状況、遺構・遺物の出土状況などについては、写真撮影を適宜行い、記録した。



表土掘削状況



実測状況

第 3 節 整理作業の経過

整理事業は平成 24 年度埋蔵文化財整理調査受託事業として、株式会社平安（代表取締役 中野宰孝）と沼津市（市長 栗原裕康）の間で「平成 24 年度上障子遺跡埋蔵文化財整理調査委託契約書」を締結し、実施した。整理作業は沼津市教育委員会文化振興課文化財調査係が担当し、市内大諏訪 46-1 に所在する、沼津市文化財センターにおいて実務を行った。

土器の洗浄までは有限会社パル文化財研究所において行われていたことから、註記作業から始めた。さらにそれら土器の接合作業を行い、同時に復元樹脂による強化と復元作業を行った。出土した土器の量じたいが少なく、接合しても全体の器形が復元できたものはほぼ皆無であったが、底部や脚部などについて、元の器形がある程度判明したものに関しては、株式会社シン技術コンサルに業務委託をし、正射投影撮像装置（SIOS-1000）を用いた等倍の画像を撮影して、実測に利用した。

SIOS-1000 は、立体物の寸法精度を保ったまま結像し歪みのない、正射投影と呼ばれる方法を用いるため、完全な画像の投影が可能である。したがって、土器の実測をする場合、この写真を実測用の下絵として用いることで、迅速かつ正確な実測図を作製することができる。これらの方法を利用しながら、手実測を交えて鉛筆による素図を作成し、スキャニングした後、Illustrator 上でペンタブレットによるトレースを行った。また、特徴的な口縁部片などについては株式会社ラングに業務委託をし、3次元レーザースキャナー（PEAKIT）による実測図を作成し、合わせて掲載している。

これらの作業と並行して、報告書の図版の作成と原稿の執筆を行った。遺構図版は、現地作業時にデジタルデータとして取り込んだものに、必要最低限の編集を加えて整合性を確認し Illustrator 上で再編集した。これらの編集作業は、「整理事業支援業務委託」として、沼津市において本遺跡管理システムを運用・管理している株式会社シン技術コンサルの社員が、担当職員の指示に従って実施した。

写真図版については、現地調査時に撮影した記録写真および、整理作業時に撮影した遺物の記録写真を合わせて整理し、原稿については調査日誌などの記録を基本資料としながら執筆を進めた。

以上の作業を行った後、原稿、遺構・遺物図版、写真図版などすべてを InDesign 上に割り付けた。



遺物包含層の精査

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

上障子遺跡の所在する沼津市は、駿河湾に面した伊豆半島西岸の付け根に位置し、旧国区分でいう駿河と伊豆の境界に市域が及ぶ。市街地は市域南部を中心に広がり、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯や黄瀬川扇状地が広がっている。北部には富士山を背に愛鷹山がその裾野を広げているが、愛鷹山の丘陵地は新幹線や東名高速道路の開通、工業団地の進出などで大きく開発が進んだ。また、平成24年4月14日には新東名高速道路の御殿場JCT～三ヶ日JCTまでが開通し、さらに人・物・情報などの交流が活発化するとともにインターチェンジ周辺の開発が期待される。

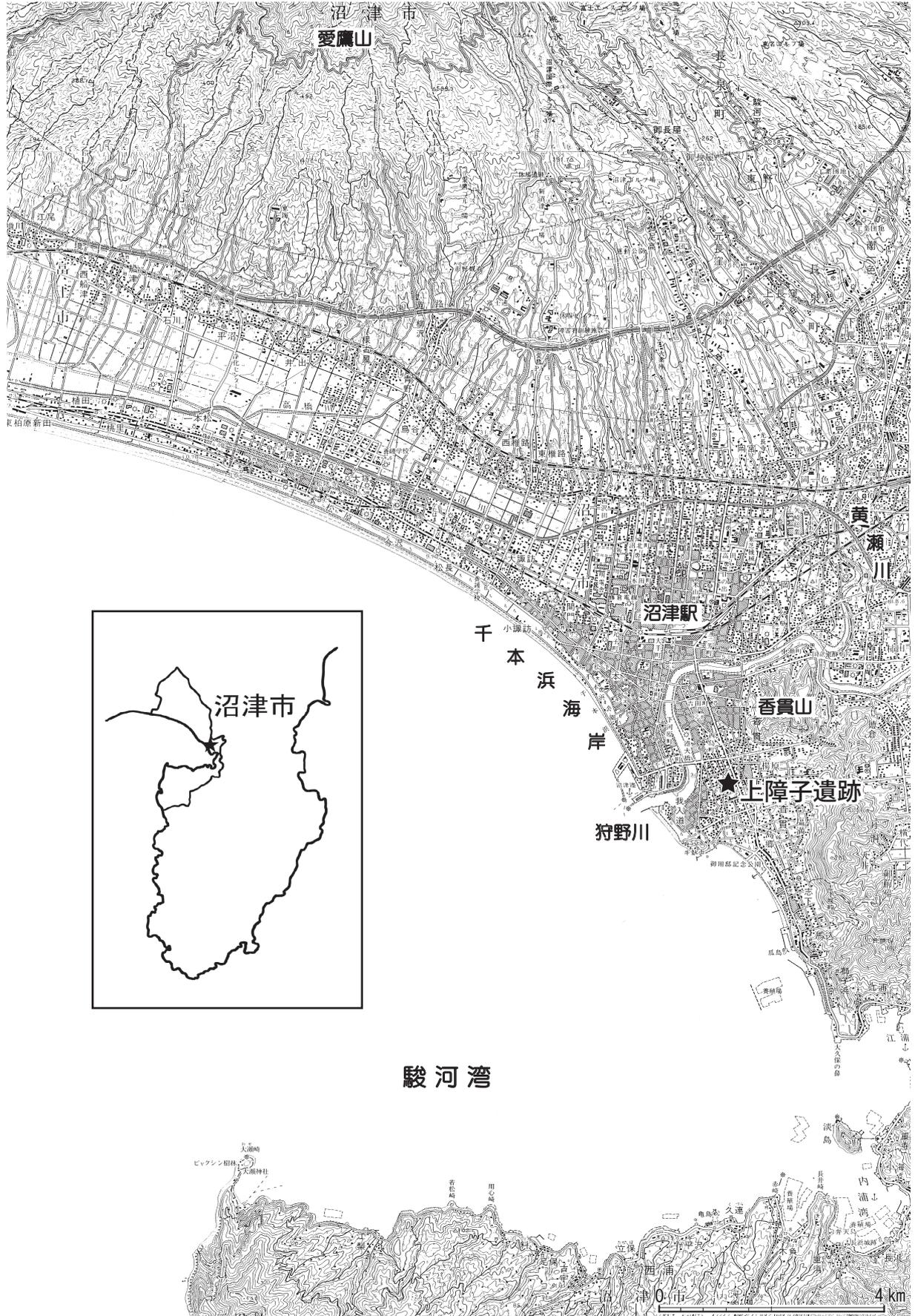
上障子遺跡は沼津市南部の下香貫字上障子に位置する。狩野川下流の左岸、沼津港から東へ約0.9kmの地点にあたり、調査区は国道414号線（通称八間通り）と県道144号線に挟まれている。この香貫地区は、西側を江川の支流が南西方向へ流れ、東側は香貫山と徳倉山、西側～南側は駿河湾によって囲まれる。また、香貫山は山裾が強く張り出す部分があり、下香貫地区を中心にリアス式の入江のような入り組んだ山稜が連なる。南西方向には狩野川河口～牛臥山北西端まで約700m続く牛臥砂丘が存在する。

この地域の地形は、香貫山の西麓～南麓より西方向（狩野川下流方向）へ広がる微高地と、低地と大きく分けることができる。微高地は標高3m以上を中心とするが、低地部は2mに満たず、微高地と1m近い比高差を生じていることから、両者の間には地形による明瞭な境界が存在する。上障子遺跡は標高2.5m前後の微高地西端部に位置し、今回の調査区は標高2.4mに広がる。明治時代の測量図（第2図）を見ると、上障子遺跡の西側には狩野川の氾濫に備えたと思われる土手が築かれており、低地部とは視覚的にも明確に区切られている。この微高地上では多くの遺跡や古墳が確認されているが、そのなかで最も標高が低く、微高地の西端部に位置しているのが上障子遺跡である。（第3図）。

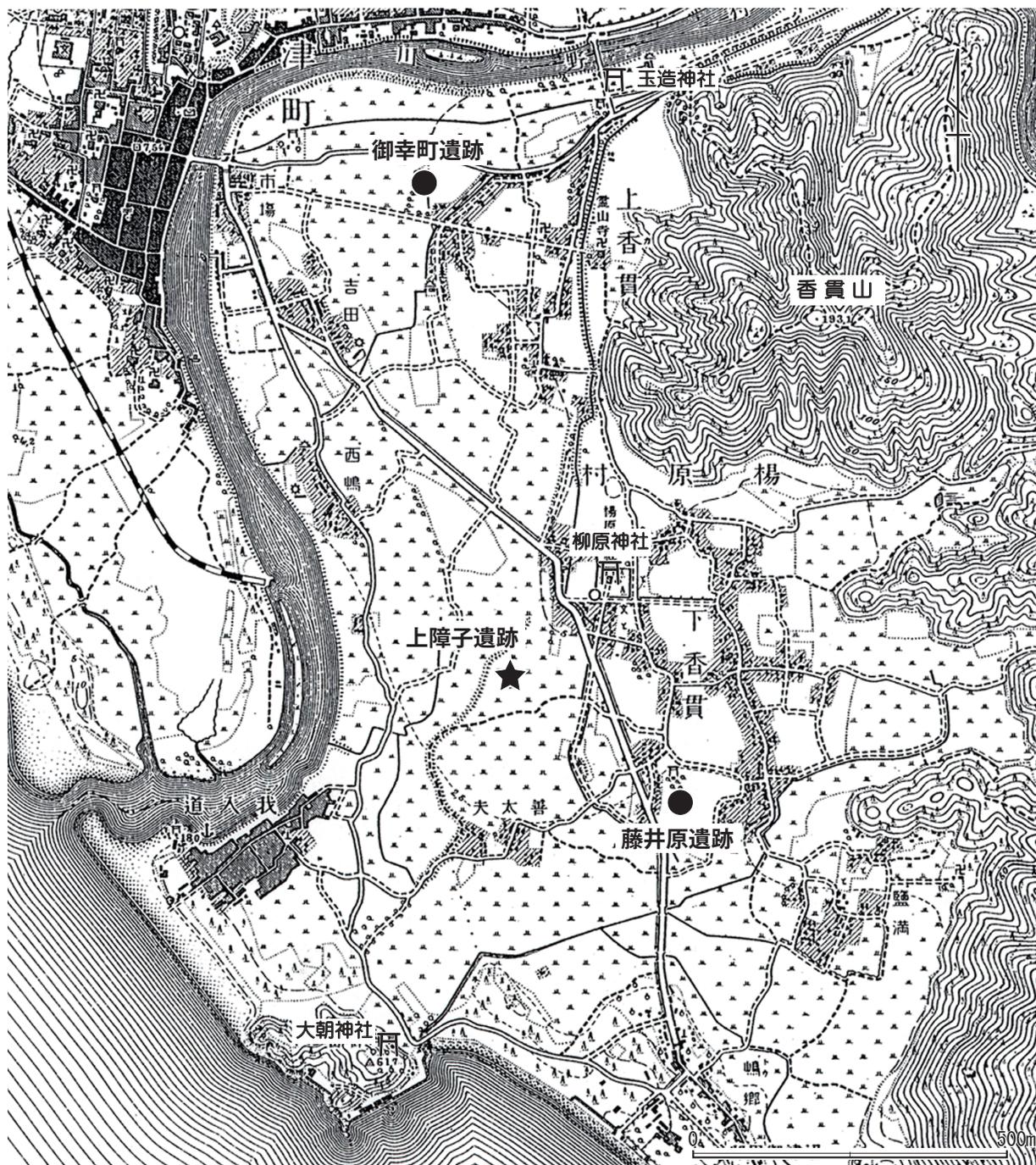
また、微高地と低地では土地利用の面でも大きく異なっており、微高地は集落と畑地が多く、低地は水田として利用されることが多い。開発以前の測量図から、その利用方法の差は明白である。ただし、旧測量図や本調査の土層堆積状況を見ると、上障子遺跡付近は微高地の末端部分に位置するものの、水田として利用されてきたようである。

本遺跡の南東約0.4kmの微高地南端部に位置する藤井原遺跡では、この地域の地形や地質について詳細な検討が行われている。それによれば、この微高地は地形的には砂礫州に属し、円礫層を基盤として、その上に黄瀬川や狩野川からの堆積物が重なり現地形を形成している。円礫層は縄文の海進（縄文時代後期～晩期）に伴うものであり、永代橋―第三小学校―藤井原遺跡以西には分布しないとされているが、本遺跡はそのちょうど境界付近に立地する。本遺跡ではボーリング調査の結果、深度1.2m付近より下位で径5～40mm程度の礫が混じる砂層が認められ、深度5.2m付近より下位で径5～30mmの円礫を主体とする砂礫層が確認されている。この砂礫層は藤井原遺跡で確認された微高地の基盤となる層に対応するもので、黄瀬川系の堆積物から成る“黄瀬川層”と考えられる。

今回の調査は非常に小規模であり、近接する地域で詳しい調査が行われたこともないため、上障子遺跡付近の地形や地質については不明瞭な部分が多い。上障子遺跡が営まれた古墳時代初頭、狩野川の流路は現在よりやや東側であったと考えられており、遺跡のかなり近くまで蛇行していたことになる。微高地上に立地する遺跡のなかでは最も標高の低いところに位置していることから、狩野川の洪水時には大きな被害を受けたかもしれない。とはいえ、周囲の低地部は水稻耕作に適した氾濫原となり、藤井原遺跡の南側には塚田川河口のラグーン（潟湖）が形成されていた可能性が高く、海の資源にも恵まれた生活を送っていたことが想像される。



第1図 遺跡位置図 (1/100,000)



第2図 明治34年大日本帝国陸地測量部二万分一地形図「沼津」

第2節 周辺遺跡と歴史的環境

【旧石器時代・縄文時代】

遺跡のほとんどが愛鷹山東南麓の斜面上に集中している。狩野川左岸地域では、両時代に属する遺跡は発見されていない。縄文海進時には、海岸線が上障子遺跡付近まで及び、遺跡周辺は海岸もしくは浅海のような環境であったと思われる。

【弥生時代】

前期～中期にかけては、市域全体を通して確認できる遺跡が非常に少なく、後期から急激に増加する傾向がある。生活圏は愛鷹山麓に限らず、浮島沼周辺部から黄瀬川砂礫層が堆積する低位の台地へと広



第3図 上障子遺跡周辺地形図

主に古墳時代の遺跡 ● 古墳 ※昭和54年測量図を基にした簡易図。等高線の一部を省略。

これら集落は前期を主体にピークを迎え、その後、衰退していく。代わって後期になると、微高地全体に円墳を中心とした古墳が多く築造される。香貫地区は市内でも有数の古墳の群集域であり、宮原古墳群では全国的にも例の少ない把手付き硯やT字形鉄製品が出土した。東本郷古墳群では、単鳳環頭大刀が見つかっている。

【奈良・平安時代】

沼津市域は駿河国東部の中心地であり、いまだに郡衙の位置は特定できていないものの、関連する集落や寺院跡が発見されている。郡衙と関わりが深いと考えられる遺跡としては、千本砂礫州上の千本遺跡、狩野川右岸の黄瀬川扇状地上に位置する上ノ段遺跡と下石田原田遺跡があり、狩野川左岸には御幸町遺跡と藤井原遺跡の大規模集落が存在する。この頃には狩野川の流路が現在の位置にほぼ固定化し、より安定した環境のなかで集落はさらに発展した。下石田原田遺跡では住居址150基、掘立柱建物址96棟、御幸町遺跡では住居址230基、藤井原遺跡では住居址97基が検出されるなど、大規模な集落の様相が明らかとなっている。

狩野川左岸地域では、古墳時代に確認された遺跡がほとんど消滅し、衰退していた御幸町遺跡と藤井原遺跡が復興して、この地域の拠点集落となる。立地条件や出土遺物などから、両遺跡の生活基盤は異なり、基本的な集落の性格も異なっていたと思われるが、埴形土器が大量に出土した点では共通しており、調物として納めていた堅魚を計画的に加工・生産していたものと考えられる。また、鞆の羽口や多量の鉄滓、様々な鉄製品が出土しており、集落内で行われていた小規模な鍛冶の様子をうかがい知ることができる。

がり、狩野川左岸地域では中期頃から居住が始まったようである。居住が顕著になるのは後期からだが、現在のところ、まとまった住居址は御幸町遺跡の45基だけであることから、御幸町遺跡付近が1つの拠点となっていたものと考えられる。

【古墳時代】

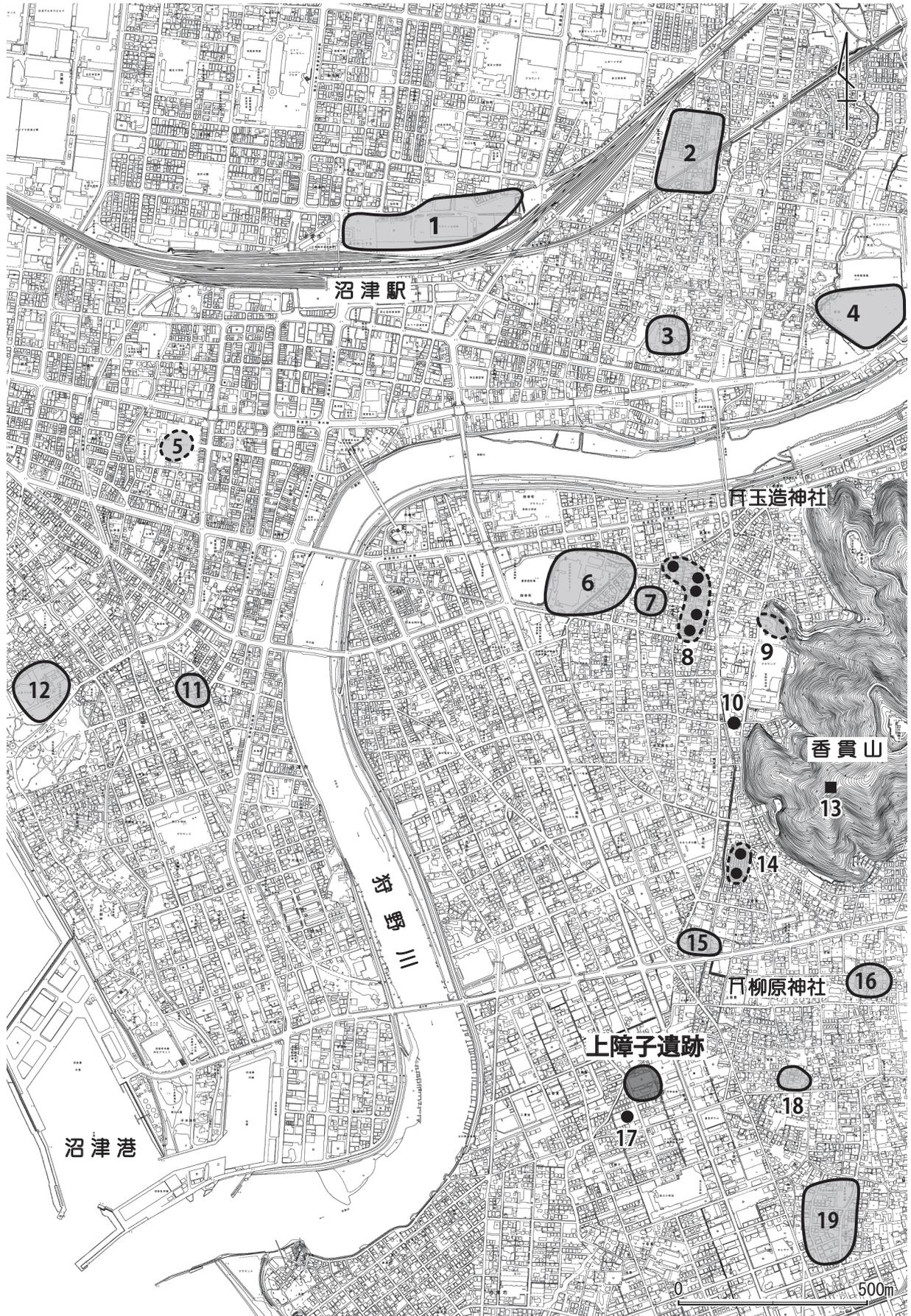
愛鷹山麓から平地部へ生活圏が移行し、千本砂礫州上や狩野川下流に多くの遺跡が立地する。狩野川左岸地域でも遺跡数がやや増加するが、なかでも御幸町遺跡と藤井原遺跡では比較的大きな集落が営まれた。特に藤井原遺跡では86基の住居址が検出され、掘立柱建物址や井戸、溝なども見つかっている。

これらの集落は前期を主体にピークを迎え、その後、衰退していく。代わって後期になると、微高地全体に円墳を中心とした古墳が多く築造される。香貫地区は市内でも有数の古墳の群集域であり、宮原古墳群では全国的にも例の少ない把手付き硯やT字形鉄製品が出土した。東本郷古墳群では、単鳳環頭大刀が見つかっている。

寺院跡としては、白鳳期の創建とされる日吉廃寺が挙げられる。塔の基壇などを検出したほか、山田寺式の軒丸瓦をはじめとする多様な瓦が出土しており、国分寺の建立以前には駿河で最大規模を誇ったものと思われる。

第1表 周辺遺跡一覧表

| 図 No. | 沼津市 遺跡No. | 遺跡名 | 時代 | 遺構の現状・検出遺構・遺物等 | 沼津市 報告書 |
|----------|--------------|----------|----------------------|--|-------------------|
| 1 | 382 | 上ノ段遺跡 | 奈良～平安 | 住居址 118 基、掘立柱建物址 40 棟、溝状遺構 19 条、土坑 3 基、ピット列 23 本、須恵器、土師器（墨書土器・線刻土器含む）、灰釉陶器、緑釉陶器、ミニチュア土器、土馬、唐三彩陶枕、帯金具、古銭、木製品 | 85・87 集 |
| 2 | 176 | 日吉廃寺跡 | 白鳳期～ 平安初期 | 塔の基壇、金堂・講堂址？、軒丸瓦（重圈文縁単弁八葉蓮華文・珠文縁単弁八葉蓮華文・複合鋸歯文縁単弁八葉蓮華文・重圈文縁複弁八葉蓮華文）、軒平瓦（重弧文・葡萄唐草文・扁唐草文・格子文） | |
| 3 | 174 | 山王台遺跡 | 弥生・古墳 奈良～平安 中世 | 弥生土器、古墳時代住居址 10 基、掘立柱建物址 3 棟、須恵器、土師器、土錘、古銭、土壘 | |
| 4 | 368 | 下石田原田遺跡 | 古墳 奈良～平安 | 古代住居址 150 基、掘立柱建物址 96 棟、溝状遺構 30 条以上、土坑 2 基、ピット 5000 基以上、須恵器、土師器（墨書土器・線刻土器含む）、灰釉陶器、土馬、土錘、紡錘車、玉類、帯金具、古銭 | 62・74 集 |
| 5 | 331 | 八幡町稻荷塚古墳 | 古墳 | 木棺（粘土槨）、須恵器、刀身、石鏃 | |
| 6 | 211 | 御幸町遺跡 | 弥生・古墳 奈良～平安 | 弥生時代住居址 45 基、溝状遺構 1 条、土坑 1 基、弥生土器（登呂式・飯田式）、有孔磨製石鏃、磨製石斧、石錘、銅鏃、有鉤銅釧 古墳時代住居址 28 基、掘立柱建物址 1 棟、溝状遺構 1 条、須恵器、土師器、滑石製模造品 5 点 古代住居址 231 基、溝状遺構 19 条、土坑、須恵器、土師器（墨書土器・埴形土器含む）、灰釉陶器、鞆の羽口、鉄鏃、鉄斧、刀子、紡錘車、鉄鏃、鉄針、鉄先、帯金具、馬の歯骨 | 17・21・ 25・67 集 |
| 7 | 210 | 住吉町遺跡 | 弥生・古墳 | 弥生土器、土師器 | |
| 8 | 209 | 東本郷古墳群 | 古墳 | 石室（横穴式）、石棺（組合式箱形石棺）、須恵器、土師器、大刀、刀子、轡、鞍金具、鐙、耳環、帯金具、金銅製環頭大刀、勾玉、丸玉、小玉、人骨 | |
| 9 | 212 | 靈山寺横穴群 | 古墳 | 横穴 11 基 | |
| 10 | 213 | 中住古墳 | 古墳 | 石室、石棺（組合式箱形石棺）、人骨 | |
| 11 | 189 | 下小路遺跡 | 古墳・平安 | 須恵器、土師器 | |
| 12 | 372 | 千本遺跡 | 奈良～平安 | 住居址 37 基、掘立柱建物址 1 棟、ピット 32 基、集石墓 56 基、須恵器、土師器（墨書土器・線刻土器含む）、灰釉陶器、緑釉陶器、鞆の羽口、土錘、敲石、磨石、鉄鏃、刀子、斧、釣針、帯金具、皇朝十二銭 | 79 集 |
| 13 | 214 | 香貫山経塚 | 平安 (12C 後半) | 銅製経筒 2 口、陶製壺 2 個、甕、青白磁合子 3 口、一字一石経、鏡 4 面、北宋銭 10 枚、刀、水晶念珠玉 2 個 | |
| 14 | 216 217 | 宮原古墳群 | 古墳 | 石室（横穴式）、石棺（組合式箱形石棺・半割拔式箱形石棺）、須恵器（把手付硯など）、T字形鉄製品、鉄鏃、轡、金環 | 「市誌」下 「県史」1 |
| 15 | 215 | 二瀬川遺跡 | 弥生 | 住居址、底部穿孔土器 | |
| 16 | 219 | 山ノ根遺跡 | 弥生・古墳 | 弥生土器、土師器、大型石錘 | |
| 17 | 340 | 障子川古墳 | 古墳 | 石棺 | |
| 18 | 302 | 馬場遺跡 | 古墳 | 土師器（大廓式）、有頭大型石錘 | |
| 19 | 222 | 藤井原遺跡 | 弥生・古墳 奈良～平安 | 弥生時代住居址 1 基、弥生土器、有孔磨製石鏃、銅鐙飾耳、 古墳時代住居址 86 基、掘立柱建物址 9 棟、溝状遺構 6 条、ピット 2 基、焼土址 3 か所、井戸址 2 基、土師器、土錘、石錘、鉄製品、管玉 古代住居址 97 基、掘立柱建物址 2 棟、溝状遺構 8 条、井戸址 7 基、須恵器、土師器（墨書土器・埴形土器 200 点以上含む）、土錘、鞆の羽口、石錘、鉄鏃、刀子、鉋、鉄斧、鉄鏃、鉄滓、紡錘車、銅鏃、有鉤銅釧、貴金具 | 7・10・ 11・13 集 |



第4図 周辺遺跡分布図

第3節 遺跡の層位

本調査区は標高 2.4 m の微高地上に立地する、面積 40m²ほどの非常に狭い範囲であり、全体はほぼ平坦である。土層の堆積状況は北側および西側の壁面で観察され、大きく 4 層に分層された。以下に、各層位の特徴を詳しく述べる。

1 層は表土である。2 層は水田の耕作土と、その床土である。さらに 2 層に分層され、2 a 層は灰褐色土 (7.5YR4/2)、2 b 層は褐色土 (7.5YR4/3) で、ともに締まりがあり、2 a 層の方がより粘性が強い。

3 層は粘性のある暗褐色土および黒褐色土で、さらに 6 層に細分することができる。3 a 層は暗褐色土 (10YR3/4) である。やや粘性が強く、径 10～30mm の礫を少量含む。西壁で確認されたのみで、5 層をわずかに覆っている。3 b 層は黒褐色土 (10YR2/2) で、径 1～2 mm の赤褐色スコリア (5YR4/6) を微量に含み、やや粘性が強く、締まりもある。3 c 層と 3 d 層は暗褐色土 (7.5YR3/3) で、径 1～2 mm の赤褐色スコリア (5YR4/6) を微量に含む。両層とも締まりがあるが、3 c 層は粘性がやや強く、3 d 層はやや弱い。3 e 層と 3 f 層は暗褐色土 (7.5YR3/4) で、やや粘性が弱い。ともに赤褐色スコリア (5YR4/6) を微量に含むが、3 f 層には径 10～30mm の礫が少量含まれている。

4 層は褐色土 (7.5YR4/4) で、やや粘性が弱い。2 層に分層され、4 b 層は径 200mm ほどの礫を多量に含む砂質土で、非常に硬く締まっている。

表土直下の 2 層は粘土質の土層で、かつての水田面である。この土層調査の結果は、旧測量図 (第 2 図) に示されていたように上障子遺跡付近が水田として利用されていたことを裏付けるものである。

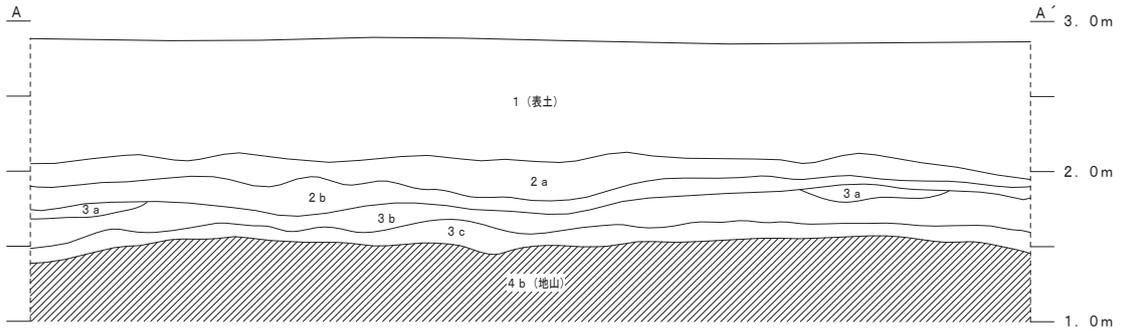
4 層は地山で、径 200mm ほどの大形の礫を含む点を特徴とする。藤井原遺跡や、本遺跡のボーリング調査で認められた、微高地の基盤となっている砂礫層 (黄瀬川層) である。

3 b 層～3 f 層は遺物包含層である。出土した土器を見ると、奈良・平安時代の土師器よりもむしろ、大廓式を中心とした弥生時代後期～古墳時代の土器が多く含まれていた。また、わずかに検出された遺構の覆土にもなっている。

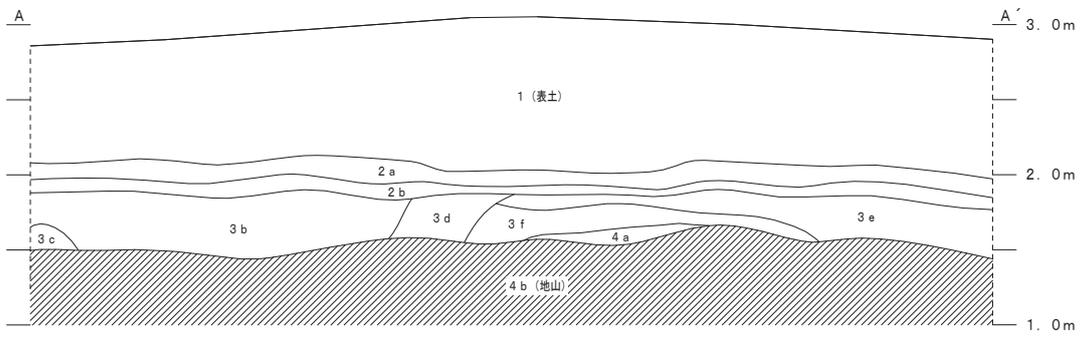
このように上障子遺跡の土層は、微高地の基盤となる黄瀬川層 (砂礫層) の上に、暗褐色土 (スコリアの混在したシルトや砂質土) が堆積し形成されている。

【参考文献】

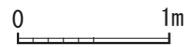
- 瀬川裕一郎・鈴木裕篤・杉山治夫ほか 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書 I 遺構編』沼津市文化財調査報告第 13 集
瀬川裕一郎・小野信義ほか 1979『御幸町遺跡第 1 次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告第 17 集



西壁セクション図



北壁セクション図



第5図 土層セクション図



第6図 グリッド設定図

第三章 遺構と遺物

第1節 遺構と遺物の分布

調査区が非常に狭いこともあり、遺構としては、土坑1基とピット2基が検出された。遺構の確認面は4層の黄瀬川層である。

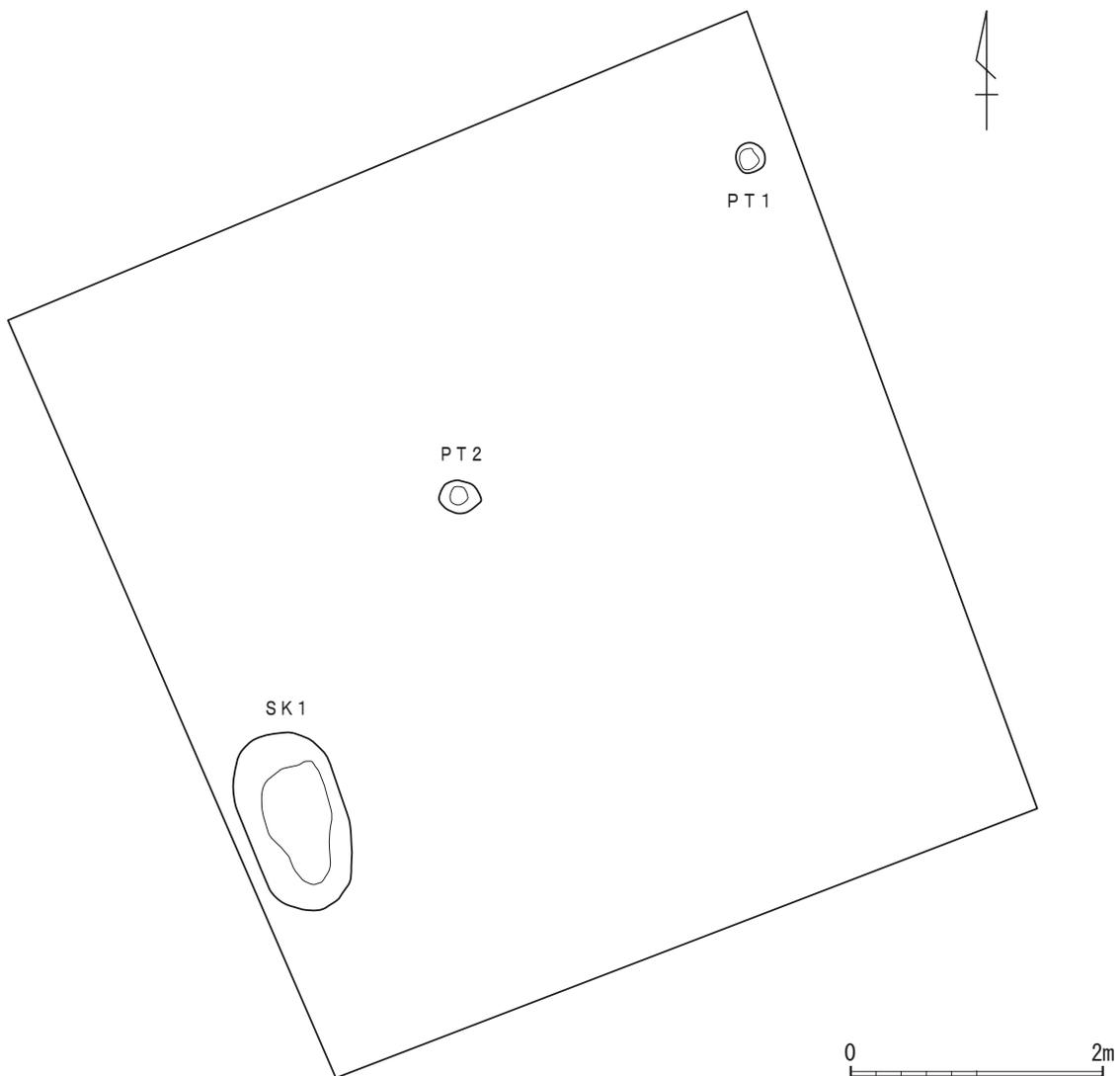
遺物としては土器と土錘が出土し、特に第1号土坑の覆土内に土器が密集していた。また、遺物の一部は3層の暗褐色土層から見つかったが、ほとんどは表土で取り上げられたものであり、弥生時代後期～古墳時代に属するものと、律令時代に属するものに分けられる。

第2節 遺 構

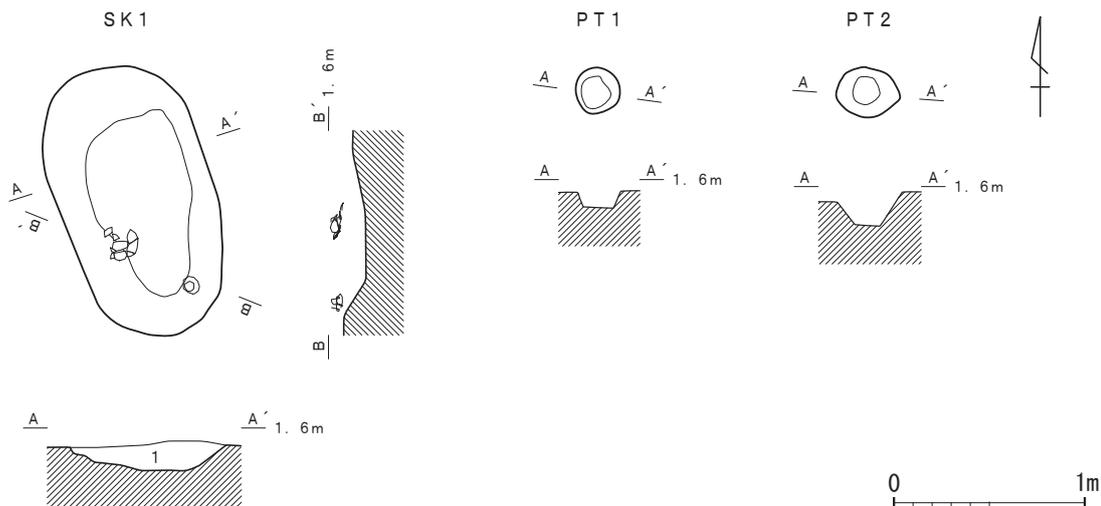
(1) 土坑

第1号土坑（第8図）

調査区南西の西壁沿いで検出された。長径148cm、短径80cm、深さ16cmを測り、平面形は楕円形を呈する。覆土内から大廓式土器がある程度まとまって見つかり、「S字甕」の脚部も出土したことから、時期としては古墳時代初頭に属するものと考えられる。



第7図 遺構分布図



第8図 土坑およびピット実測図

覆土は粘性のやや強い黒褐色土（10YR2/2）で、径1～2mmの赤褐色スコリア（5YR4/6）を微量に含み、焼土を含む。これは本遺跡の基本土層で確認された3層にあたる。

【出土遺物】（第9図）

覆土内から多くの土器が出土した。特に目立つのは大廓式土器で、底部に加え、胴部の一部がまとまって出土しており、同一個体と考えられる土器片も多数見つかった。

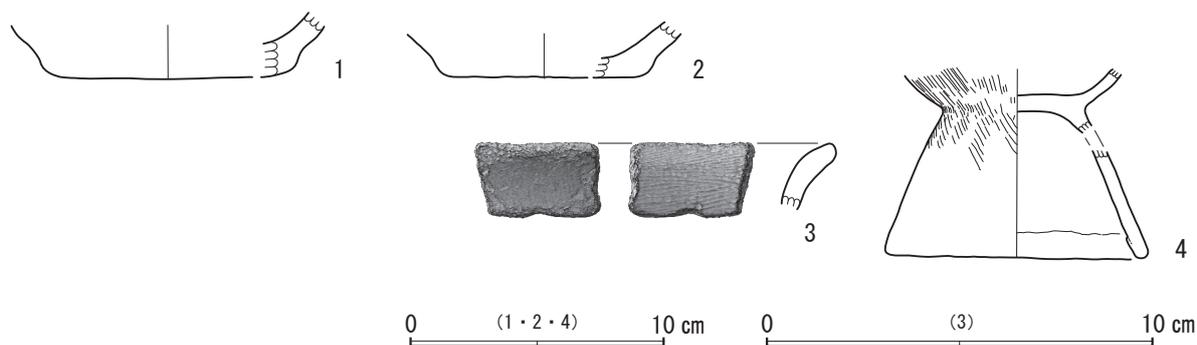
第9図1は大廓式壺の底部である。すぐそばで大廓式の胴部が出土しており、同一個体の可能性が高い。2は壺の底部である。内外面ともに広く磨滅しているが、胴部外面ではヘラミガキが認められる。3は甕の口縁部である。緩やかに外反し、内面はハケメによって調整される。4はS字甕の脚部である。「ハ」の字状に開き、裾部を折り返す。

（2）ピット（第8図）

調査区の北東隅で第1号ピットが、中央付近で第2号ピットが検出された。第1号ピットは、径24cm、深さ10cmほどで、平面形は円形を呈する。第2号ピットは径32cm、深さ20cmほどで、平面形は楕円形を呈する。

第3節 遺物

遺構外では、多量の土器片と土錘1点が出土した。全体の器形がわかるようなものはほぼ皆無であったため、口縁部や胴部下位～底部を中心に図化を行った。弥生時代後期～古墳時代に属するものが中心であるが、律令時代に属するものもある程度まとまって見つかった。



第9図 第1号土坑出土遺物

(1) 弥生時代後期～古墳時代 (第10・11図)

土器の器種としては、壺・鉢・甕・高坏が確認された。壺には大廓式に属するものが含まれており、甕にはいわゆる「S字甕」が含まれていた。また、口縁部と胴部の一部が出土したのみであるが、出土点数に比して高坏が多く認められる。

第10図1～4は壺の口縁部である。1と2は硬くしっかりとした印象で、内面にはハケメが認められる。3と4は折り返し口縁を有し、内外面ともにヘラミガキによって整えられている。4は折り返し部の手前で強く屈曲し、端部を丁寧に面取りする。5・6・7は壺の底部である。5は厚手で、内面は粗いハケメ、外面はヘラミガキによって調整されている。7は胴部が緩やかに内湾して立ち上がり、外面には赤彩が認められる。8・9は鉢である。8は口縁部で、内外面にヘラミガキが施され薄手である。9は短い口縁部を付し、外面はヘラミガキによって整えられる。

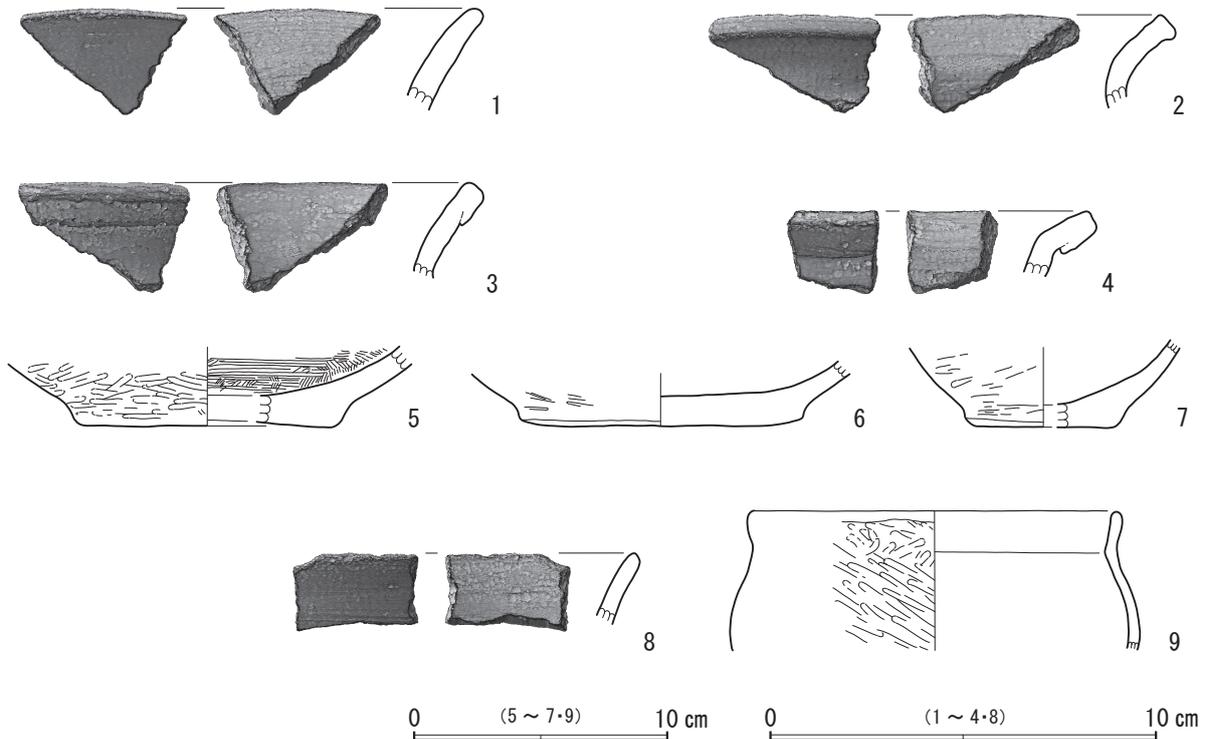
第11図1～3は甕の口縁部である。1はS字甕で、ヨコナデにより稜線を形成し、胎土に金色の雲母を含んでいる。3は緩やかに外反し、端部を面取りする。4～7は高坏である。4は外傾しながら直線的に立ち上がり、内外面ともにヘラミガキが施されている。5・6は緩やかに内湾し、薄手である。7は下位に明瞭な段を有し、そこから直線的に立ち上がる。内面は非常に丁寧にヘラミガキによって整えられている。

(2) 律令時代 (第12図)

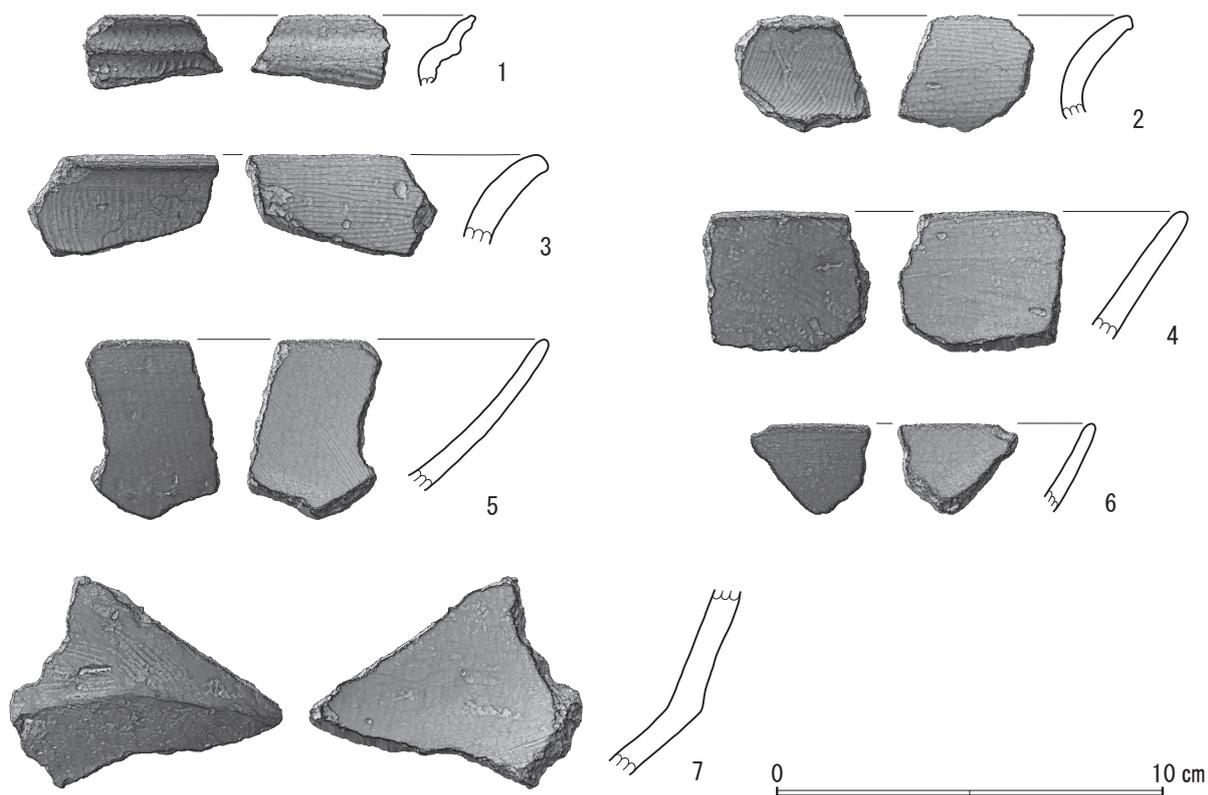
土器の器種としては、小型鉢・坏・甕が確認された。また、土製品として土錘1点が出土している。

第12図1は小型鉢である。やや粗雑なつくりで、胴部外面には指頭による調整痕、底部には木葉痕が認められる。2は坏の底部と考えられ、回転糸切痕が認められる。3と4は甕の口縁部である。ともに厚手で、3には輪積みの際の粘土の重なりが残されていた。

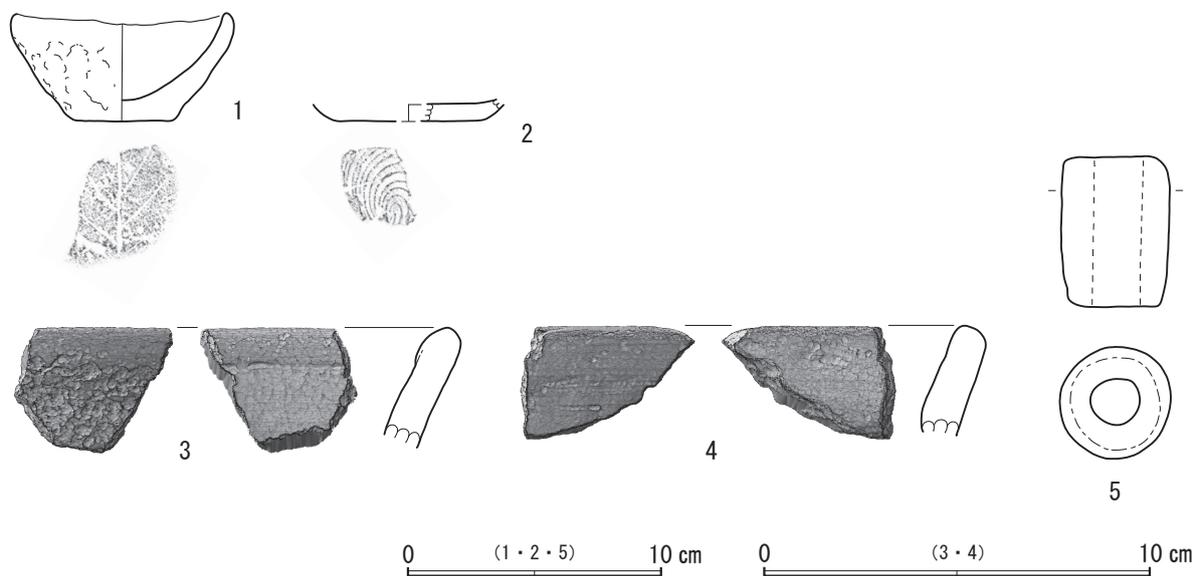
5は土錘である。第1号土坑のすぐ脇で出土した。内面が平坦に整っていることから、成形には軸棒を使用したと考えられる。



第10図 弥生時代後期～古墳時代出土遺物 (1)



第 11 図 弥生時代後期～古墳時代出土遺物（2）



第 12 図 律令時代出土遺物

第2表 土器観察表(1)

| 図版 No. | 器種 | 出土地点 | 法量 | 胎土 | 焼成色調 | 残存部位 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|--------|----|-------------|------------------|---------------------------------|-------------------------|--------------|---------------------------------------|---------------------------|-------------------|
| 9-1 | 壺 | SK1 覆土 | — — 9.4 | 密 (白色砂粒やや多い) | 普通 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 胴部下位 ~底部 | 胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。 | 外面：ナデ、底部磨減 | 大廓式 |
| 9-2 | 壺 | SK1 覆土 | — — (8.1) | 密 (白色砂粒少量・半透明白色砂粒微量) | 普通 10YR7/4 にぶい黄橙色 | 胴部下位 ~底部 | 胴部は外傾して立ち上がる。 | 内面：磨減 外面：ヘラミガキ(大半は磨減) | |
| 9-3 | 甕 | SK1 覆土 | — — — | 密 (白色砂粒やや多い・半透明白色砂粒微量) | 普通 5YR6/6 橙色 | 口縁部 | 緩やかに外反する。 | 内面：ハケメ | |
| 9-4 | 甕 | SK1 覆土 | — — 10.1 | 密 (白色砂粒微量・半透明白色砂粒少量・金雲母やや多い) | 普通 7.5YR6/6 橙色 | 胴部下位 ~脚部 | 脚部は「ハ」の字状に開き、裾部を折り返す。胴部はやや内湾して立ち上がる。 | 外面：ハケメ (広範囲に渡り磨減) | S字甕 |
| 10-1 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (白色・赤色砂粒微量) | 良 7.5YR7/6 橙色 | 口縁部 | 硬く、しっかりとした印象。 | 内面：ハケメ 外面：ヘラミガキ | |
| 10-2 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (半透明白色砂粒微量) | 良 7.5YR7/6 橙色 | 口縁部 | 硬く、しっかりとした印象。大きく外反し、端部を丁寧に面取りする。 | 内面：ハケメ | |
| 10-3 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 | 普通 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 口縁部 | 折り返し口縁を有する。 | 内外面：ヘラミガキ | |
| 10-4 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (白色砂粒・半透明白色砂粒微量) | 普通 7.5YR6/4 にぶい橙色 | 口縁部 | 折り返し口縁を有する。折り返し部手前で強く屈曲し、端部を丁寧に面取りする。 | 内外面：ヘラミガキ | |
| 10-5 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — (10.1) | 密 (白色砂粒少量) | 普通 5YR6/6 橙色 | 胴部下位 ~底部 | 胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。 | 内面：ハケメ(粗い) 外面：ヘラミガキ | |
| 10-6 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — (11.0) | 密 (白色砂粒微量・半透明白色砂粒少量) | 普通 10YR7/4 にぶい黄橙色 | 胴部下位 ~底部 | 胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。 | 内面：ハケメ 外面：ハケメ→ナデ、ヘラミガキ | |
| 10-7 | 壺 | 遺構外 (表土) | — — (5.7) | 密 (半透明白色砂粒微量) | 普通 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 胴部下位 ~底部 | 胴部は緩やかに内湾して立ち上がる。 | 外面：ヘラミガキ、赤彩 | |
| 10-8 | 鉢 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 | 普通 10YR6/3 にぶい橙色 | 口縁部 | わずかに外反する。 | 内外面：ヘラミガキ | |
| 10-9 | 鉢 | 遺構外 (表土) | (14.2) — — | 密 | 普通 2.5Y7/3 浅黄色 | 口縁部~ 胴部上位 | 短い口縁部を付し、胴部は緩やかに内湾する。 | 内外面：ヘラミガキ | |
| 11-1 | 甕 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (半透明白色砂粒・金雲母微量) | 普通 7.5YR6/6 橙色 | 口縁部 | 稜線が形成され、断面がS字状を呈する。 | 内面：ヨコハケメ 外面：タテハケメ | 外面スス 附着 S字甕 |
| 11-2 | 甕 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 | 普通 10YR6/4 にぶい黄橙色 | 口縁部 | 緩やかに外反する。 | 内外面：ハケメ | 外面スス 附着 |
| 11-3 | 甕 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (半透明白色砂粒微量) | 普通 7.5YR7/6 橙色 | 口縁部 | 緩やかに外反し、端部を面取りする。 | 内面：ヨコハケメ 外面：タテハケメ→ナデ | |
| 11-4 | 高坏 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (白色・赤色砂粒少量) | 普通 7.5YR7/4 にぶい橙色 | 口縁部 | 外傾しながら、直線的に立ち上がる。 | 内外面：ヘラミガキ | |
| 11-5 | 高坏 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (白色砂粒やや多い) | 良 5YR6/6 橙色 | 口縁部 ~坏部 | 緩やかに内湾する。 | 内面：ハケメ 外面：ハケメ→ナデ、ヘラミガキ | |
| 11-6 | 高坏 | 遺構外 (表土) | — — — | 密 (白色砂粒やや多い) | 普通 5YR6/6 橙色 | 口縁部 | 非常に薄手で、緩やかに内湾する。 | 内外面：ハケメ→ヨコナデ | |
| 11-7 | 高坏 | 遺構外 (3層) | — — — | 密 (白色・赤色砂粒微量) | 普通 5YR6/4 にぶい橙色 | 坏部 | 坏部下位に明瞭な段を有し、そこからやや外傾しながら直線的に立ち上がる。 | 内面：ヘラミガキ 外面：ハケメ、ヘラミガキ | |

第3表 土器観察表(2)

| 図版 No. | 器種 | 出土地点 | 法量 | 胎土 | 焼成色調 | 残存部位 | 形態の特徴 | 手法の特徴 | 備考 |
|--------|-----|---------|-----------------------|-----------------------|-------------------------|------------|-----------------------------|----------------------------------|-------------|
| 12-1 | 小型鉢 | 遺構外(3層) | (8.2) 4.3 (4.2) | 密 (白色・赤色砂粒・微量) | 普通 7.5YR5/4 にぶい褐色 | 口縁部 ～底部 | 緩やかに内湾して立ち上がる。 やや粗雑なつくり。 | 外面：口縁端部ヨコナデ、 胴部指頭圧痕、 底部木葉痕 | |
| 12-2 | 坏 | 遺構外(表土) | — — (5.7) | 密 | 普通 5YR5/4 にぶい赤褐色 | 底部 | 胴部は内湾して立ち上がる。 | Rロクロ成形 底部回転糸切痕 | |
| 12-3 | 甕 | 遺構外(表土) | — — — | 密 (白色砂粒・半透明白色砂粒微量) | 普通 10YR6/4 にぶい黄橙色 | 口縁部 | 厚手で、直線的に立ち上がる。 | 内外面：ヨコナデ (外面の大半は磨滅) | 輪積み時の粘土の重なり |
| 12-4 | 甕 | 遺構外(表土) | — — — | 密 (白色砂粒微量) | 普通 5YR6/6 橙色 | 口縁部 | 厚手で、直線的に立ち上がる。 端部を面取りする。 | 外面：ヨコナデ | |

第4表 土製品観察表

| 図版 No. | 種別 | 出土地点 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 外径 (cm) | 内径 (cm) | 高さ (cm) | 重量 (g) |
|--------|----|---------|------------|----|----------------|---------|---------|---------|--------|
| 12-5 | 土錘 | 遺構外(3層) | 密 (白色砂粒少量) | 普通 | 7.5YR6/6 橙色 | 4.3 | 1.9 | 5.9 | 84.6 |

第IV章 調査成果

1. 上障子遺跡の立地と出土状況

上障子遺跡は、狩野川左岸の微高地西端部、標高 2.5 m 付近に位置する。周囲を駿河湾・狩野川・香貫山および徳倉山に囲まれ、香貫山の西麓～南麓から狩野川下流方向に、遺跡の立地する微高地が広がっている。この微高地は大半が海拔 3 m 以上の高さを有し、地形的には砂礫州に属する。微高地の基盤は黄瀬川層と呼ばれる砂礫層（富士川系の円礫含む）で、その上に黄瀬川や狩野川からの堆積物が重なって現地形を形成している。本遺跡では、径 20cm ほどの礫を含む黄瀬川層の上に、シルト・砂質土にスコリアの混在した粘性のある暗褐色土が堆積していた。遺物包含層はこの暗褐色土であり、遺構はさらに黄瀬川層を掘り込んでいた。

今回の調査区は 40㎡と非常に狭く、遺構は土坑 1 基とピット 2 基が検出されたのみであった。土坑は深さ 16cm と浅いが、覆土内から大廓式土器がある程度まとまって発見され、S 字甕も出土したことから、所属時期は古墳時代初頭とすることができる。その他に出土した土器は、弥生時代後期～古墳時代に属するものと、律令時代に属するものと大きく分けられる。全体の器形がわかるような個体がほぼ皆無であり、土器から得られる情報はわずかであったが、少なくとも 2 つの時期において生活の痕跡が認められたことになる。

2. 遺跡周辺の地形環境と集落の様相

上障子遺跡の立地する香貫地区の沖積地は、大きく微高地と低地に分けられる。宅地化が進む以前、おもに微高地上は集落と畑地、低地は水田として利用されていた。また、狩野川流路沿いの自然堤防上にも集落と畑地が分布しており、地形を活かした土地利用が行われていたことがわかる。

狩野川左岸地域では、現在のところ縄文時代以前に属する遺跡は確認されていない。海退により微高地が陸地化したと考えられる、弥生時代中期頃から居住が認められるが、まとまった住居址が確認されているのは、後期に属する御幸町遺跡のみである。

古墳時代になると遺跡数にやや増加が見られ、なかでも御幸町遺跡と藤井原遺跡は比較的大きな集落を形成した。特に上障子遺跡に近い藤井原遺跡では、86 基もの住居址や掘立柱建物址、溝状遺構などが検出されている。これらの遺跡は前期をピークに衰退していき、後期になると古墳の築造が目立つようになる。

律令時代になると、古墳時代に確認された遺跡はほとんど消滅し、一時、衰退していた御幸町遺跡と藤井原遺跡が復興して、この地域の拠点集落となる。海退と沖積作用により狩野川の流路が現在の位置にほぼ固定化したことで居住環境はより安定し、御幸町遺跡は県東部最大級の集落を形成した。

上記のように、狩野川左岸地域では弥生時代後期～律令時代を中心とした遺跡が確認されており、これらはすべて微高地上に分布している。地形図（第 3 図）から明らかなように、集落は標高 3 m 以上を中心に立地するが、古墳はほとんどが 5 m 以上に造られた。古墳時代前期には、狩野川の流路が現在よりやや東側に寄っており、微高地により近いところを川が流れていたと考えられる。また、藤井原遺跡の南側には、塚田川の河口付近から徳倉山の方向に向かって汽水域が残り、ラグーンを形成していたことが想定される。中期～後期には、地盤沈下もしくは海進によって海水準が 1～2 m 上昇したといわれており、後期に築造された古墳が比較的標高の高い位置に造られているのは、このような状況が影響しているのかもしれない。

狩野川左岸地域では、弥生時代～律令時代を通じて集落の形成が認められるが、この地域の拠点となっているのは常に御幸町遺跡と藤井原遺跡である。上障子遺跡は両遺跡と同時期に集落が形成されていた

と考えられることから、集落の様相を推測するうえで参考になる部分も多いであろう。

御幸町遺跡と藤井原遺跡における古墳時代の出土遺物を見ると、在地の壺・甕・高坏などを主体に、パレススタイル壺やS字甕・「く」の字甕などの東海西部系土器が出土している。藤井原遺跡では、小型壺や小型鉢といった器種に加え、二重口縁壺や丸底甕などの畿内系土器、多量の筒状の土錘や、駿河湾地方特有の有頭石錘が出土するといった特徴も認められた。

律令時代の特徴的な出土遺物としては、墨書土器や灰釉陶器、埴形土器や「壺G」、様々な鉄製品が挙げられる。藤井原遺跡は、多量の土錘をはじめとした漁撈具に加え、200点以上の埴形土器を出土していることから、調物として納める堅魚を計画的に加工・生産する水産加工センターのような性格を持った漁村集落であったと考えられる。一方、御幸町遺跡では、同じように多量の埴形土器が出土しているものの、藤井原遺跡に比べると漁撈具の出土が少なく、灰釉陶器が多く発見されるなどの違いがあることから、海に近い立地条件を活かした水産加工を行いつつも、基本的には水稲耕作を基盤とした、農村的集落であったと考えられる。

3. 上障子遺跡の性格

上障子遺跡は微高地の末端部に位置しており、南東にある藤井原遺跡と立地条件が近い。藤井原遺跡で見られた、弥生時代後期～古墳時代の土器の多彩な器種構成や、外来系土器（特に東海西部系）の一部は本遺跡でも認められている。微高地上に営まれた多くの遺跡は、全時代を通じて大きな水害に見舞われることはなかったであろうが、末端部に位置する本遺跡と藤井原遺跡はその影響を大きく受けた可能性が高い。それは、藤井原遺跡で遺構の破壊された痕跡が認められたことから推察される。また明治時代の測量図では、西側の低地部との境界付近に土手が築かれており、狩野川の洪水時には大きな影響を受けたと思われる。流路が現在地に固定化する以前には、被害はより大きなものであったであろう。

上障子遺跡は南東部に広がっていたと想定されるラグーンや、狩野川などを基にした、豊かな水産資源に恵まれた一方で、水害に見舞われる危険と隣り合わせであったのかもしれない。今回の調査だけでは、遺跡の様相や性格を考えるにはあまりにも資料不足であり、今後の調査によって遺跡の詳細が明らかになることを期待したい。

【引用・参考文献】

- 瀬川裕一郎・鈴木裕篤・杉山治夫ほか 1978『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ 遺構編』沼津市文化財調査報告第13集
瀬川裕一郎・小野信義ほか 1979『御幸町遺跡第1次発掘調査概報』沼津市文化財調査報告第17集
沼津市教育委員会 2002『沼津市史 資料編 考古』

写 真 图 版



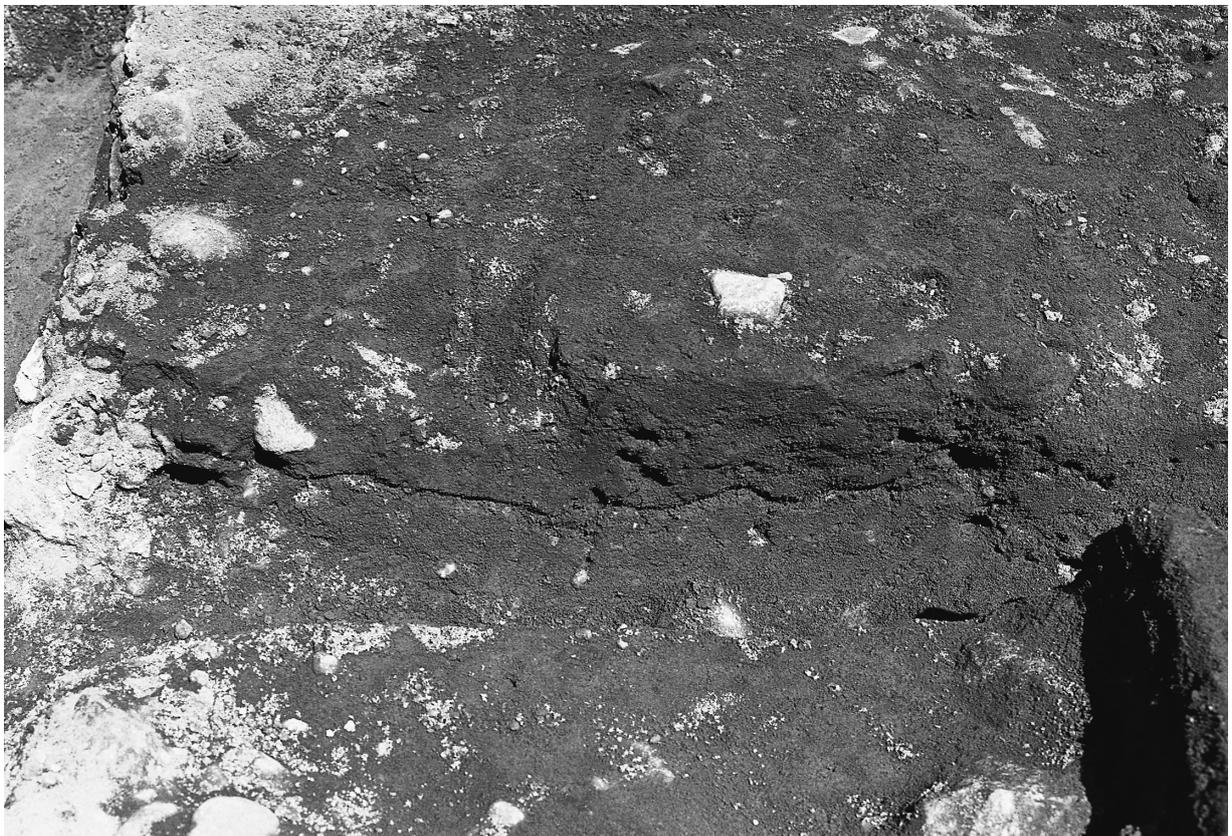
調査区周辺風景



調査区全景



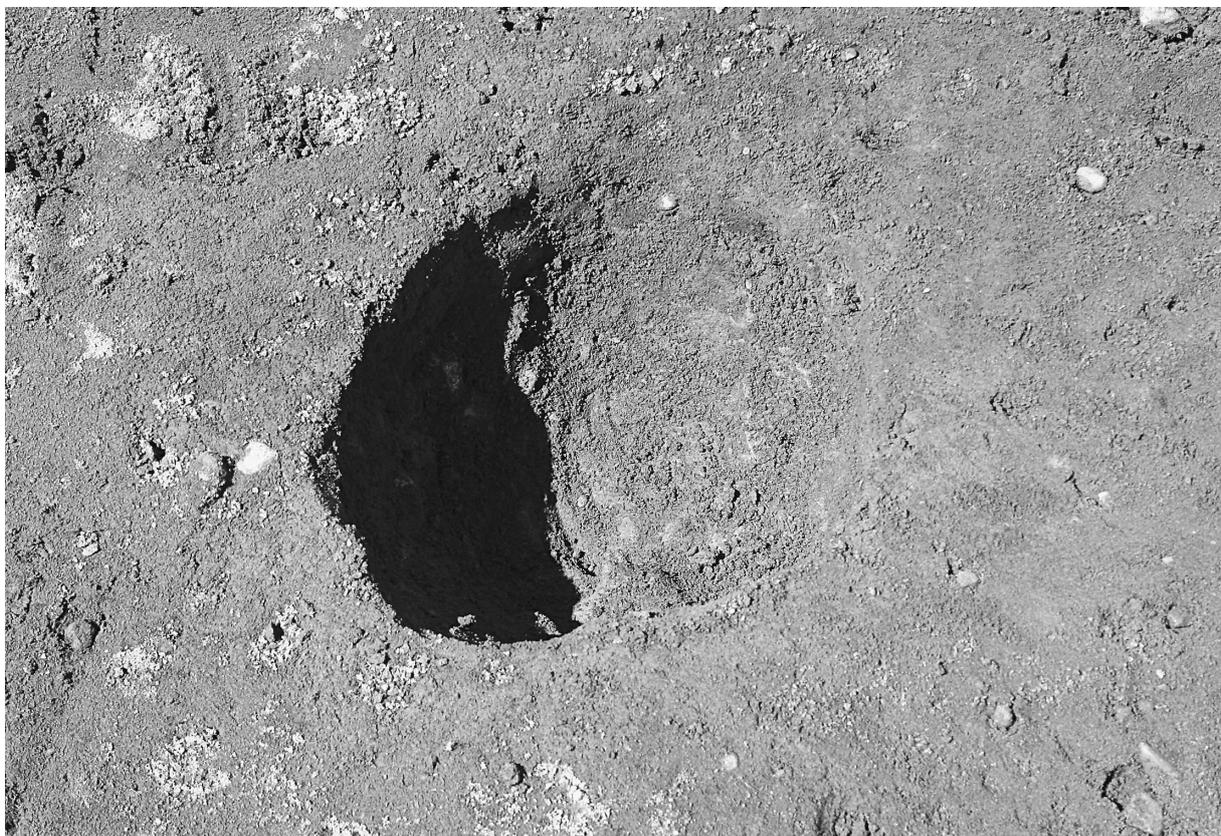
第 1 号土坑完掘状况



第 1 号土坑断面



第1号ピット完堀状況



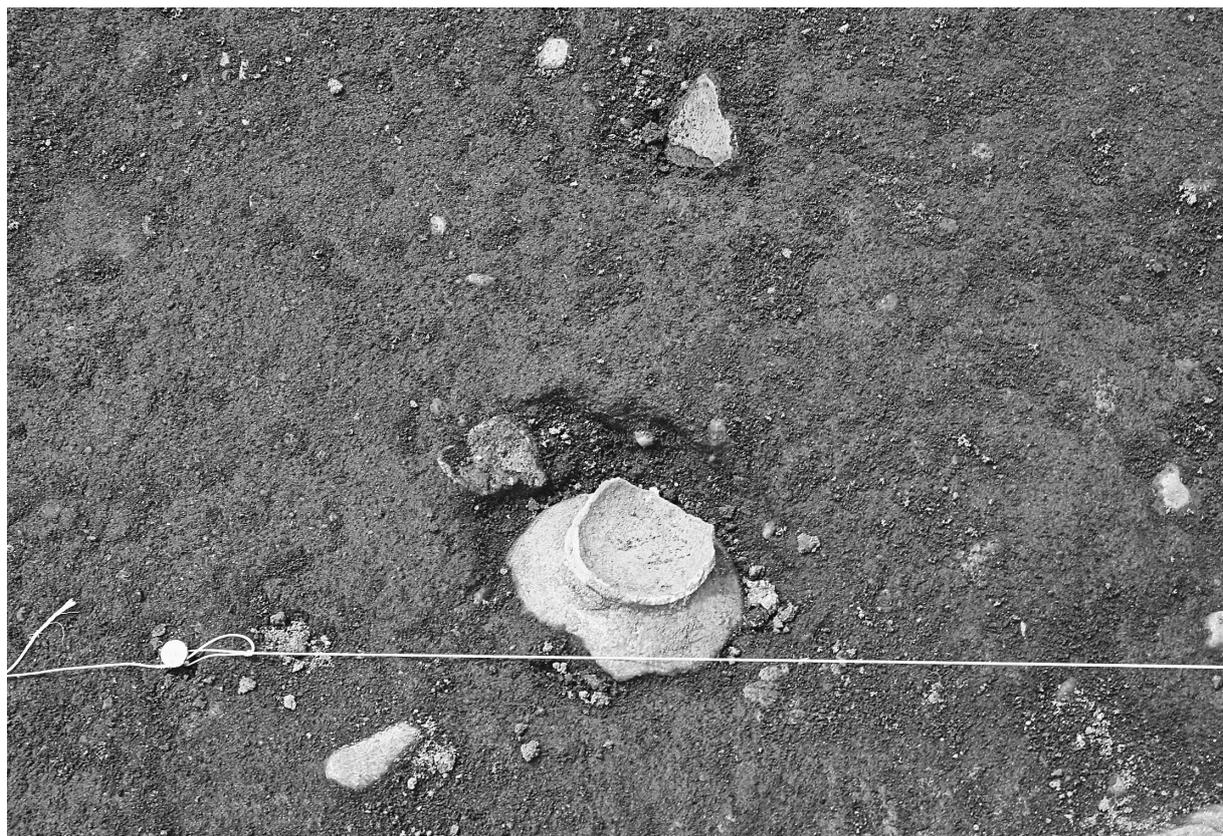
第2号ピット完堀状況



第1号土坑遺物出土状況



第1号土坑遺物出土状況（大廓式）



第1号土坑遺物出土状況（S字甕）



第1号土坑遺物出土状況（S字甕）



遺構外遺物出土状況（小型鉢）



遺構外遺物出土状況（土錘）



西壁土層セクション



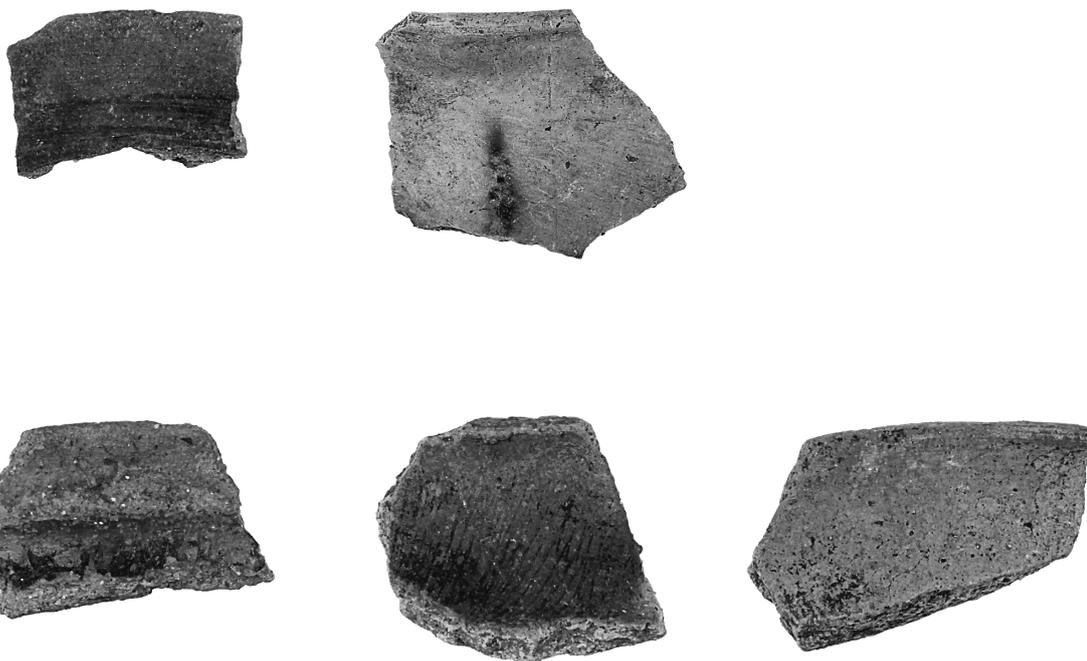
北壁土層セクション



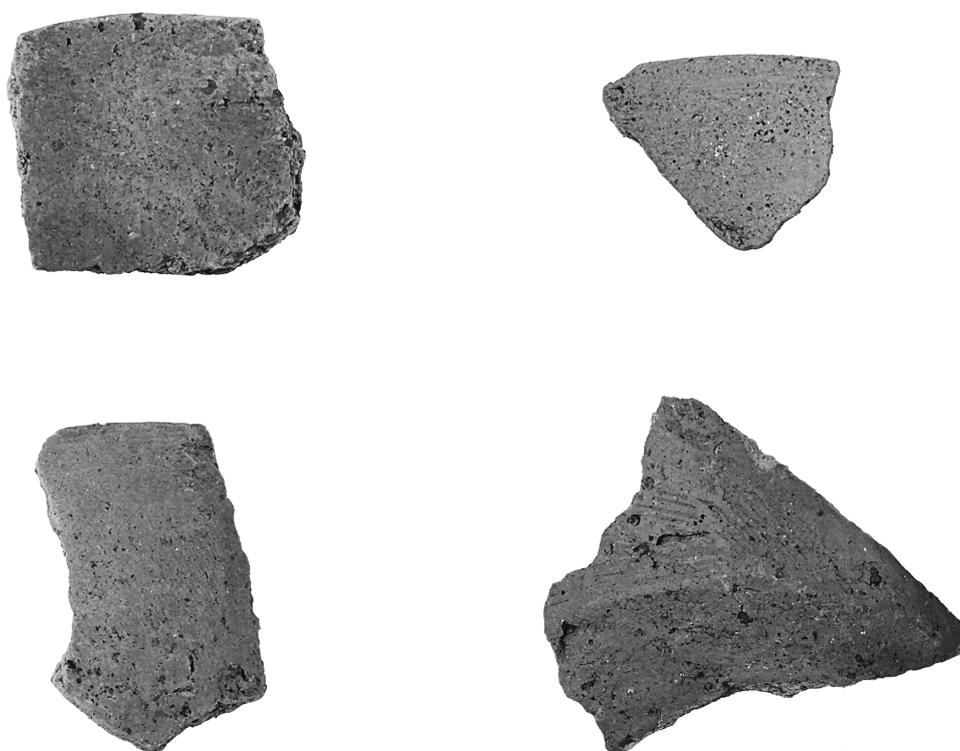
第1号土坑出土土器



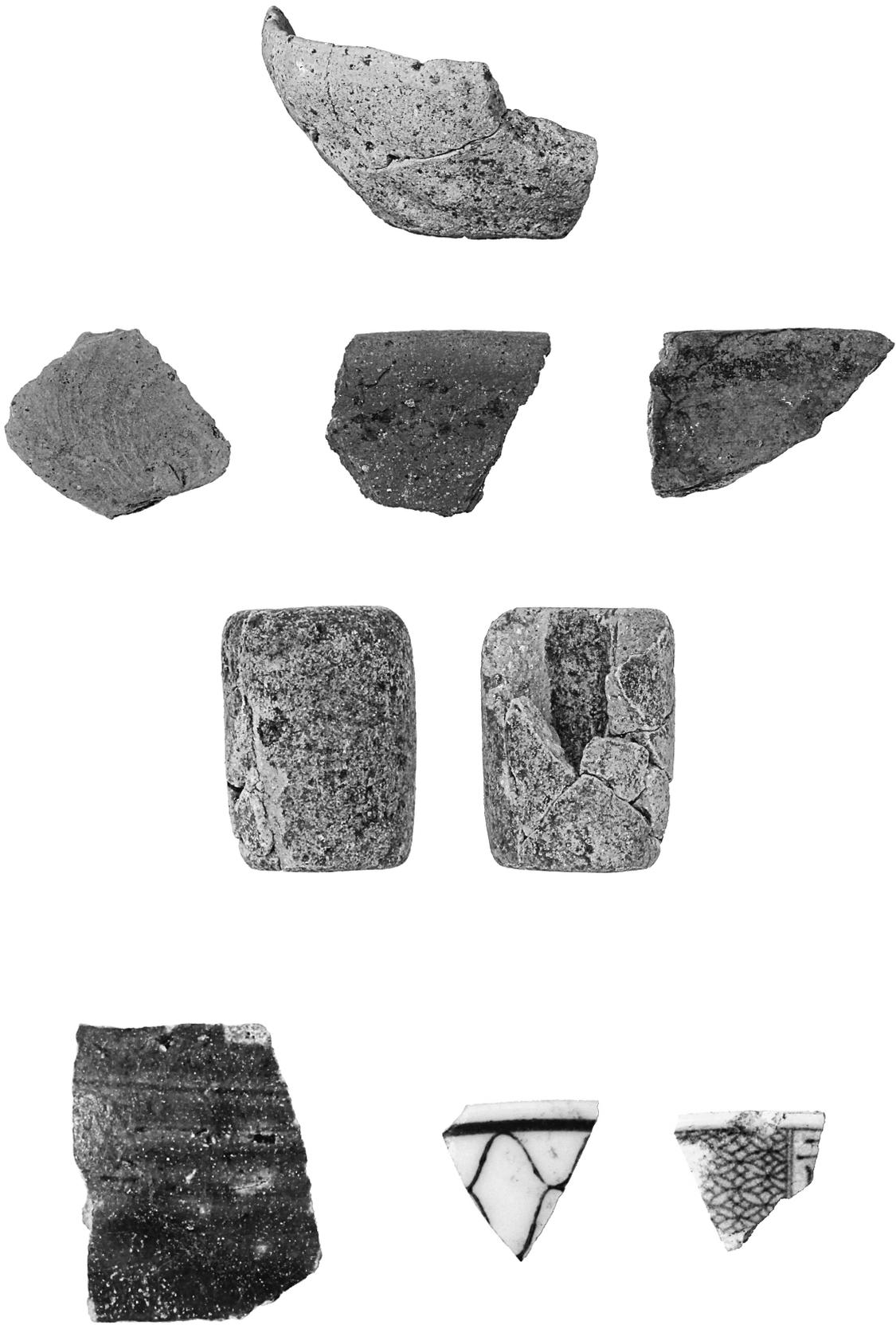
弥生時代後期～古墳時代出土土器（壺）



弥生時代後期～古墳時代出土土器（鉢および甕）



弥生時代後期～古墳時代出土土器（高坏）



律令時代出土遺物（小型鉢・坏・甕・土錘）およびその他出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | かみしょうじいせきはつつちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|--------------------|---|-------------|------|-------------------|--------------|---------------------------|----------|---------------|
| 書名 | 上障子遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 沼津市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第106集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 池谷信之 北佳奈子 | | | | | | | |
| 編集機関 | 沼津市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒410-8601 静岡県沼津市御幸町16番1号 TEL 055-931-2500 (代) | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2013年1月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査 面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 世界測地系 | | | | |
| かみしょうじいせき 上障子遺跡 | ぬまづししもかぬきあざ 沼津市下香貫字 かみしょうじ 上障子 394他 | 22203 | 398 | 38° 08' 96" | 日本測地系 | 20110411 ～ 20110422 | 40㎡ | 立体駐車場 建設工事 |
| | | | | 138° 86' 18" | | | | |
| | | | | 35° 08' 63" | 138° 86' 49" | | | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な年代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 上障子遺跡 | 集落址 | 弥生後期 ～古墳 | 土坑 | 土器 (大廓式・S字甕など) | | | | |
| | | 律令 | | 土師器・土錘 | | | | |
| 要約 | <p>上障子遺跡は、狩野川下流の左岸、沼津港から東へ約0.9kmの地点に位置する。この地域の地形は香貫山の西麓～南麓より狩野川下流方向へ広がる微高地と、低地とに大きく分かれ、微高地上には多くの遺跡や古墳が立地している。本遺跡は標高2.5m付近の微高地西端部に広がり、微高地の基盤となる黄瀬川層（砂礫層）の上に、暗褐色土が堆積して形成されている。</p> <p>今回の調査では土坑1基とピット2基が検出され、出土した土器から、弥生時代後期～古墳時代および律令時代において集落が営まれていたことが想定される。本遺跡の西側には狩野川が流れているが、弥生時代～古墳時代には流路が現在よりやや東側に寄っていたと考えられ、微高地上に立地する遺跡のなかで最も標高が低い本遺跡は、豊かな水産資源を得ることができた一方で、海進や洪水などによる水害に見舞われてきた可能性が高い。</p> <p>調査範囲が非常に狭く、資料が不足していることから、遺跡の全容を把握するには今後の調査を待ち、より詳細な検討を行う必要がある。</p> | | | | | | | |

沼津市文化財調査報告書 第106集

上障子遺跡発掘調査報告書

平成25年1月30日 印刷

平成25年1月31日 発行

編集／沼津市教育委員会

発行／沼津市教育委員会

沼津市御幸町16番1号

TEL 055-931-2500 (代)

印刷／みどり美術印刷株式会社